

写真でマスターする 支台歯形成の基本テクニック

小川 匠・平林里大・井川知子・加納貴充 著

A4判・88頁・定価6,825円(税込)

2012年11月30日 ヒョーロン・パブリッシャーズ刊

塩見 信行

(大阪府枚方市／しおみ歯科クリニック)



本書の序文でも述べられているように、支台歯形成について書かれた本は、これまでに多数出版されている。しかし、この本のユニークな点は、文章に比重を置いた従来の指導書とは異なり、細かい1つ1つのステップを、その段階ごとに写真で示し、形成のテクニックを目でみて理解させようとしているところであろう。さらに、そのテクニックを“明日からすぐに実践できるもの”として提供するために、いろいろと工夫していることである。

たとえば、本書の中には「目線」とマーキングされている写真がしばしば登場するが、これは、術者の術中時の目線の意味で、写真はそのアングルに従って撮影されている。これをみれば、ある作業段階でのパールの角度やタービンの位置、レストを置く位置などが一目で理解できるのである。

また、本書には「(形成を行う前に)支台歯の最終形態をイメージしましょう」というメッセージがくり返し出てくる。筆者も、日ごろより「完成図がイメージできていなければ、どれだけ練習したとしても、目標とする支台歯の最終形態に近づくことはできない」と考えていたので、我が意を得た思いがした。

このような細かい部分への配慮が隅々まで行き渡っている背景には、小川先生らの数十年に及ぶ、学部・研修医教育でつちかった経験があるからであろう。

「初心者はどこで間違えるか?」「まず、何を難しいと感じるのか?」「支台歯形成は経験を積みばうまくなるというものではない」等々、著者らの経験の中から練り上げられた意見と指導法に基づいて本の構成を考え、写真や図を組み立てているように思われた。

*

近年、合着用セメントの進歩により、テーパーが強く、維持形態が不十分な形成であったとしても、補綴物脱離の頻度は極端に減少した。また、少々アンダーカットがあっても、技工士は文句もいわずにそこを埋めてくれるので、歯科医師は装着に苦労することも少なくなった。そのせいもあって、徐々に支台歯形成を軽視する歯科医師が増えてきたのではないかと感じられる。

しかし、精度の高い補綴物を装着し、長期的に良好な予後を維持するためには、当然ながら正確な支台歯形成、マージン部がきれいに採れた印象採得、ラボサイドによる精密な技工操作などが必要不可欠である。

中でも、天然歯を切削する支台歯形成のステップは特に重要である。

なお、本書の冒頭に、支台歯形成を始める前に確認すべき項目について述べている個所がある。ここに目を通していくと、日々の臨床で常に心がけてはいるものの、実際にはおろそかになりがちな事項が多く指摘されており、改めて反省し、襟を正さざるを得なかった。

最後に、一読者として要望を申し上げれば、形成時の歯肉損傷による悪影響を防ぐという意味合いから、歯肉圧排の重要性についてもっとと言及していただきたいかと思う。さらに筆者は、歯肉損傷という観点から、支台歯形成の場合、必ずしもタービンが適しているわけではなく、5倍速コントラヘッドを用いる利点もあると考えているが、著者らはそのあたりをどのように考えているのか、そのことに対する説明などもあったらと感じた。もし機会があれば、ご教示いただきたい。

今回、本書を読ませていただき、自分自身の支台歯形成を振り返る非常によい機会となった。精度の高い補綴物を患者に提供するために、今一度、自分自身の支台歯形成を振り返り、多くの歯科医師に読んでいただきたい一冊として推奨したい。